

# 九州帝国大学工学部建築学講座蒐集図書の利用の痕跡： 医学部整形外科学教室手術室の配色計画に着目して

西山, 雄大  
武庫川女子大学生生活環境学部：講師・博士（工学）

<https://hdl.handle.net/2324/7385447>

---

出版情報：日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）. 2025, pp.263-264, 2025-09. Architectural Institute of Japan

バージョン：

権利関係：



九州帝国大学工学部建築学講座蒐集図書の利用の痕跡  
—医学部整形外科学教室手術室の配色計画に着目して—

正会員 ○ 西山 雄大\*

九州帝国大学建築課 建築図書 洋雑誌  
病院建築 色彩計画 神中正一

## 1. はじめに

九州帝国大学工学部建築学講座<sup>注1)</sup>は専任の人員を擁さず、営繕組織である建築課の歴代技師が教育を担った。この講座は戦後設置された建築学科の直接の前身組織とは見なされていないが、戦前から蒐集蓄積された和洋の専門図書が新設学科の教育研究資源として継承されている<sup>1)</sup>。実際に、当該図書類と見られる学科設置以前の刊行物が多く現存することを、調査で確認済みである<sup>2), 3), 注2)</sup>。時期は限られるが、建築課員が工学部助手を兼任して講座の物品図書類の管理にあたった<sup>注3)</sup>ことから、実務と教育を担う課と講座それぞれの組織運用や連携を解き明かすための鍵となる存在が専門図書であると言える。

しかし一方で、蒐集図書類が建築課による設計活動や、あるいは講座の教育活動に実際にどのように活用されたのかを示す資料は殆ど確認できていない。本稿では、管見の限り唯一となる、建築課の設計実務上の具体的な参照状況が明らかな雑誌記事の事例を、数点の史資料の照合により整理し紹介する。

## 2. 基礎資料2点の概要

## 2.1. 神中正一による参照元記事の紹介

神中正一(1890-1953)は九州帝大医学部整形外科学講座の第2代主任教授で、ドイツ一辺倒だった当時の整形外科学に仏伊英米各国の研究を取り入れ、新たな治療法や器具の開発に熱心だったことで知られる。神中の着任前に病室と外来を残して全焼した教室施設の再建整備に際しても、その発明的な手腕が揮われた。以下、手術室の計画について言及した神中自身の文章<sup>4)</sup>を引く(下線は原文ママ)。

私の教室は昭和九年に新築されたもので、(中略)手術室には相当私も工夫を凝らしたものである。特に色彩に就ては当時の九大建築課長各務工学士と充分意見を闘はし、The architectural record (vol. 71, 1932, p. 209)に出ていたシーハン氏(J. Eastman Sheehan)のColors to relieve eye strain the surgical operating theaterなる記事を参考として壁面を三段に分ち、上層は「ペルビン」仕上の艶消の淡「クリーム」、中層は青磁色、下層は薄い黄がかつた緑色の磁器「タイル」張りとし、照明はツアイスの「パントフォス」で、其笠の外表も青磁色とした。其他手術台、諸種の台、椅子等は総て青磁色「ラツカー」塗で統一した。従来手術室が清浄を旨とし、明るい事が必須の条件とされたから、壁面、天井に白色が用ひられたものが多かつたが、周壁よりする反射の眩光は術者の眼を勞らしめ、又手術野そのものは暗く見え、手術者、助手の疲労が大きい。前述の色彩は此点を考慮したもので、事実私は以前の白色手術室から此新手術室に移つた当座は、疲労

も少なく、気分も何となく和かであつた。患者にとつても明るい白色の眩光は刺激と興奮を起すかと思はれるが、恐らく緑と青は患者の精神を沈静させる効があるだろう。私は更に此方針を徹底させるために、術者、助手、器械方看護婦の消毒衣、患者を被ふ消毒敷布も全部青磁色に統一した。(以下略)

この他にも、天兒民和(1989)<sup>5)</sup>など幾つかの論考<sup>6)</sup>で、神中の建築的な試みや患者への配慮について言及がある。前掲の文はその中でも、手術室内の配色<sup>注4)</sup>について参照元の記事や企図が当事者本人により明示されている点で、とくに信頼できる。また、当時建築課長心得を務めていた各務一雄(兼工学部助教授)<sup>注5)</sup>への言及も見られる。

## 2.2. 参照元記事と掲載図版

神中(1937)が言及した米国の雑誌*The Architectural Record*, Vol. 71の該当記事<sup>7)</sup>は約2頁半の短いものだが、冒頭にカラー挿図が付く。図1は九州大学附属図書館所蔵の現品である(資料番号: 923232016012307, p. 209挿図を抜粋)。照明器具外装の色など細部に異同はあるが、上・中・下の三段に塗り分けられた壁面、青みがかつた手術衣や消毒敷布の色など、神中の記述と多くの点で符合する。

なかでも注目されるのが、図中に見られる“Green Yellow {Tint} No. 2. (by Bradley's studies Book of coloured paper)”の書き込みである。書き手の特定は難しいが、壁面最上段の色名指定を記したメモであろう。推測の域を出ないが、設計に取り入れるための調査や検討の痕跡のように見える。

## 3. その他史資料との照合

九州大学大学文書館には、設計当時の図面が数葉現存している<sup>8), 9)</sup>。図中の描写と現用当時の室内写真<sup>10)</sup>から、参照元の雑誌記事の実際の施設への反映状況を確認する。

## 3.1. 九州大学大学文書館所蔵の図面史料

手術室の断面図を見ると、壁面は下部が「磁器色タイル」で、上部が塗装仕上げの二段構成となっている一方で、具体的な色名や色番号の指定は見られない(図2)。他に、隣接する職員浴室など「磁器白タイル」「陶器白タイル」とされた箇所もあることから、塗装指示に加えて「色タイル」の文言により彩色範囲を示したものと思われる。

また、神中(1937)が挙げる特徴的な用語「ペルビン」「パントフォス」と対応する「漆喰塗ペルビンペンキ仕上」「パントフォス」<sup>注6)</sup>が、図中に見られる(図3a, b)。

## 3.2. カラー写真に写る壁面

当該手術室があつた医学部整形外科歯科口腔外科教室病室(のち、歯学部臨床研究棟)は既に現存しないが、室内のカラー写真が残されている。照明器具を含む設備機器類は当然ながら更新されているだろうが、壁面の三色構成が明瞭に視認できる(図4)。

# COLORS TO RELIEVE EYE STRAIN IN THE SURGICAL OPERATING THEATER

By J. EASTMAN SHEEHAN, M.D., Professor of Plastic Surgery, Post-Graduate Medical School, Columbia University

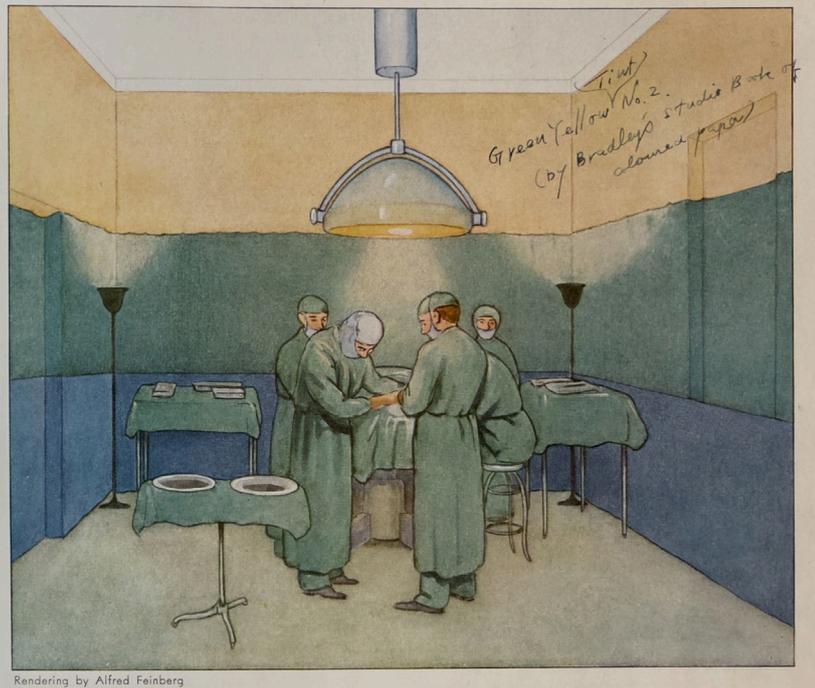


図1 Colors to Relieve Rye Strain the Surgical Operating Theaterの挿図

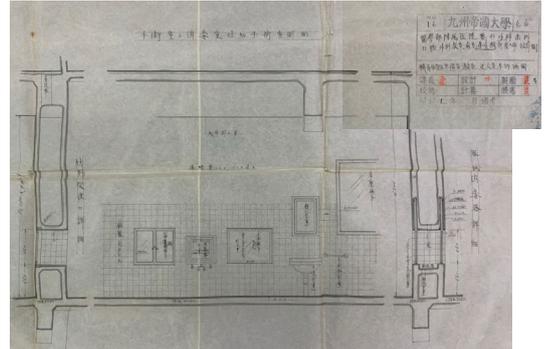


図2 「醫學部附属医院整形外科齒科口腔外科教室病室新築第一期工事設計圖／職員浴室及準備室、消毒室、更衣室等詳細圖」(No.16)より図枠および「手術室ト消毒室仕切手術室側面」抜粋  
図注) 手術室から隣室の消毒室側を見た展開図。図4と見比べると、壁面のタイル貼り範囲はほぼ同じで、それが2色に分割されたことがわかる。図枠には「昭和七年 月」とあり、課長欄には「各務」の、設計・製図・謄写欄には「國武」の押印が見える。

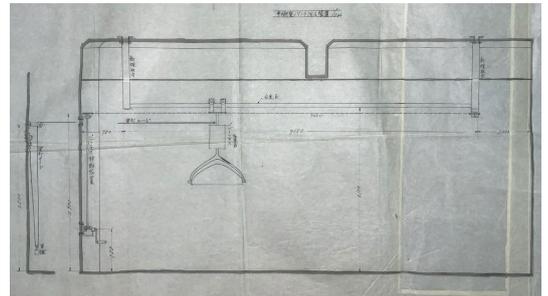


図3a 「醫學部附属医院整形外科並齒科口腔外科教室及病室第一期電気装置工事書」(No.6)より「手術室パントフォス装置 1/20」抜粋



図3b 図枠部分

図4 手術室(昭和47年頃)

図注) 壁面は全体的に図1と比べてやや彩度が低いですが、上部の塗装面はとくに差が著しい。これが退色や塗替えによるものか、あるいは撮影時の照明条件や印刷によるものか要因は定かでない。神中(1937)は「艶消の淡『クリーム』」と記しており、図1を必ずしも忠実に再現せず、タイルに合わせて別色を採用したとも考えられる。

## 4. まとめ

本稿では、建築学講座蒐集図書の活用事例として、医学部整形外科学教室の手術室を紹介した。計画に関与した神中の文章によって参照元を特定し、かつ、該当の製本雑誌現物に当時のものと思しき書き込みを確認した。後年のものだが、カラー写真から実際の施工状況も確認できた。

この雑誌記事が参照された経緯は明らかでないが、①掲載誌が建築専門誌であること②工学部の蔵書印が押されており、建築学講座の管理下にあったと推定されることの二点から、工学部教官を兼ねた各務が神中に紹介した可能性が高いように思われる。

工学部蔵書が建築課による学内営繕の参考に供されたことは、独立した建築学科を持たなかった九州帝大において、教育と営繕実務の両機能が事実上、車の両輪として一体的に組織運用されたことの一つの形跡と言えるだろう。本事例の他にも、同様の図書参照事例が存在することは十分に考えられる。さらに後究を期したい。

## 謝辞

本研究実施にあたり、九州大学大学院人間環境学研究院に学術共同研究員として受入れ頂きました。末廣香織教授はじめ関係者各位に深謝致します。資料調査においては、九州大学附属図書館および九州大学大学文書館の皆様にご協力賜りました。松本隆史氏(清水建設技術研究所・九州大学大学文書館)には、オンラインでの研究会を通して多くのご教示を頂きました。天野あゆみ氏(京都芸術大学)には、医学系参考資料の収集にご協力頂きました。記して謝意を表します。

## 注

- 1) 明治45年5月30日勅令第128号により設置。工科大学(大正8年に工学部に制度変更)の諸学科に共通する講義や実験、演習教育を担当する共通講座の一つだった。
- 2) 大学史や学科史では、図書の購入主体は建築課だとされるが、書籍には工学部蔵書印が押され学部資産として扱われている。さらに、昭和4(1929)年1月から以後数年間に購入された雑誌各号には、「建築學」の受入印が見られる。これらより、本稿では「建築学講座蒐集図書」とした。図1の収録誌(製本)にも、工学部蔵書印がある。
- 3) 技手の新谷健吾が工学部助手を兼ね、「建築学講座に関する物品取扱」を担当した(1928.10-1929.6)。詳細は参考文献1)を参照。

- 4) 病院建築の色彩計画についての本邦最初期の論考は、小島榮吉「外科手術室とその色彩」(『中央建築』第2巻、第8号、pp. 23-24およびp. 29, 1924. 7)であろう。大蔵技師の小島は、桑港在住の医学博士ハーソー・M・シャーマン軍医少佐がカリフォルニア州医学公報誌上に報告したセント・ラーク病院の緑色仕上げの手術室について紹介している。これは、主に手術者の視環境の整備に注意を払ったものである。
- 5) 昭和10(1930)年、工学部講師から助教授に昇任。各務は、第2代課長の渡部善一の急死後、課長心得に就いた(1931. 4. 25-1934. 5. 31)。
- 6) 図3aには「在来品」とあり、従前使用していたものの移設と推察される。照明器具が取付レール材にも「在来品」とある一方で、その吊り材は「新規取付」とされる。

## 参考文献

- 1) 西山雄大・松本隆史：教育資源からみる九州大学建築学科と九州帝国大学建築学講座の関係について、九州大学大学院人間環境学研究院紀要 都市・建築学研究、第44号、pp. 37-52, 2023. 7
- 2) 西山雄大：九州帝国大学工学部建築学講座の旧蔵図書について、日本建築学会九州支部研究報告集、第62号、pp. 481-484, 2023. 3
- 3) 西山雄大：九州帝国大学工学部建築学講座の旧蔵図書について―[補遺] 建築洋書の蒐集状況、日本建築学会九州支部研究報告集、第63号、pp. 553-556, 2024. 3
- 4) 神中正一：手術室の静寂と沈黙、診断と治療、第24巻、通巻第276号、pp. 169-175, 診断と治療社, 1937. 2
- 5) 天兒民和：整形外科を育てた人達第76回 神中正一教授(1890-1953)、臨床整形外科、第24巻、第11号、pp. 1312-1315, 医学書院, 1989. 11
- 6) 小林晶：本邦において正統の整形外科を確立した神中正一(1890-1953)(その二)、日本医学史雑誌、第60巻、第2号、p. 220, 医学書院, 2014
- 7) J. Eastman Sheehan: Colors to Relieve Eye Strain the Surgical Operating Theater, *the Architectural Record*, Vol. 71, No. 3, pp. 209-211, 1932. 3
- 8) 昭和七年 医学部附属病院整形外科齒科口腔外科教室新築第一期工事(構造関係) 歯1/2, 識別番号2011-00165, 九州大学大学文書館所蔵
- 9) 昭和七年 医学部附属病院整形外科齒科口腔外科教室新築第一期工事(構造関係) 歯2/2, 識別番号2011-00166, 九州大学大学文書館所蔵
- 10) 九州大学整形外科学教室 編：九州大学整形外科学教室開講百周年記念誌, 九州大学整形外科学教室, 2009. 11 (p. 129)

\* 武庫川女子大学生活環境学部 講師・博士(工学)

\* Lecturer, School of Human Environmental Sciences, Mukogawa Women's Univ., Dr. Eng.